SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

血液型ステレオタイプ肯定論者/否定論者に対するステレオタイプ：ステレオタイプ内容モデルの観点から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 橋本, 剛 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007648

血液型ステレオタイプ
肯定論者／否定論者に対するステレオタイプ
—ステレオタイプ内容モデルの観点から—

橋　本　　剛

問題と目的

ABO式血液型と性格には関連があるという考え方（血液型性格学、血液型性格判断などと称されている）は、学術的な裏付けが得られていないにも拘わらず、日本社会に長年、幅広く浸透している（佐藤，1993）。これはステレオタイプの一種でもあり、不当な差別をもたらすものとして、その有害性も少なからず指摘されている（山岡，2011）。心理学においても、なぜ人々はこのような血液型ステレオタイプ（blood-typical stereotypes）を肯定視してしまうのかについて、認知的バイアスの観点などを中心に、数多くの検討が重ねられてきた（e.g.，工藤，2003；坂本，1995）。

しかし、たとえバイアスの存在が明らかになっても、「心理学者が何を言おうと血液型性格判断は日常生活において受け入れられ実践されている」（佐藤，1993，p.198）。そのこともまた先行研究において指摘されており、たとえば講義形式で血液型ステレオタイプに反する情報を提示することによって、血液型ステレオタイプに関する態度の変容について検討した上瀬・松井（1996）では、「信念強度（血液型ステレオタイプを信じる程度）」「自己理解（血液型ステレオタイプによって自己理解が深まるという認識）」「感情（各血液型に対する否定的感情）」といった認知的・感情的成分の一部では有意な変容が認められたものの、行動的成分については有意な変容が示されなかった。さらに、「娯楽・関係促進（血液型ステレオタイプの娯楽機能や関係促進機能を認める認識）」については講義後にかえって上昇したケースも多く、このことは血液型ステレオタイプが、たとえ事実と異なるにせよ、コミュニケーションにおいて有用なトピックとして認識されている可能性を示唆している。

ここから、日本社会において血液型ステレオタイプが廃れない理由のひとつとして、血液型ステレオタイプを取り巻く社会的状況の影響が推測される。端

的に言えば、それが事実であるか否かを問わず、血液型ステレオタイプを肯定する方が、否定するよりも多くの利得を得るような社会的状況が存在しているならば、人々は血液型ステレオタイプを維持し、利用し続けるであろう、ということである。これを先述した血液型ステレオタイプの娯楽・関係促進機能と照らし合わせて考えれば、血液型ステレオタイプ肯定論者は他者から受容されやすく、逆に否定論者は他者から拒絶されやすいという可能性が想定される。世間では血液型の話題は当たりさわりのない話題と認識されており、それ故に、それを否定する人は場の空気を乱す存在としてネガティブに受け取られかねないのである（小塩, 2010）。しかし、そのことを思弁的に指摘している論説は散見されるが、実証的に検討している試みはほとんどない。そこで本研究では、血液型ステレオタイプ肯定論者（believer of blood-typical stereotypes：以下BTS肯定論者と表記）／否定論者（disbeliever of blood-typical stereotypes：同じくBTS否定論者と表記）に対するステレオタイプを検討することによって、この可能性について実証的に検討することを主たる目的とする。もし上記の推測が妥当であるならば、BTS肯定論者は、BTS否定論者よりも好ましく評価されると考えられる。

BTS肯定論者／否定論者に対するステレオタイプ内容モデルの適用

ただし、BTS肯定論者は否定論者よりも、全面的に好ましく評価されるというのも非現実的であろう。なぜなら、血液型ステレオタイプはその妥当性が疑わしいという学術的心理学の見解も、少なからずの人々にはすでに共有されており、血液型ステレオタイプを無批判に肯定することも、批判的思考力の欠如などの観点からネガティブに受け取られかねないからである。これに関連して、廣岡・小川・元吉（2000）では、クリティカルシンキング（批判的思考）ができる人は社会的望ましさや力本性が高く評価されやすい一方で、個人的親しみやすさは低く評価される傾向にあることが見出されている（元吉, 2013も参照）。ここから、BTS肯定論者／否定論者に対するステレオタイプとして、人柄や親しみやすさの次元では否定論者より肯定論者の方が好ましく評価されやすいが、能力や知性の次元では肯定論者よりも否定論者の方が高く評価されやすい、という両面価値的なステレオタイプが想定されよう。

ステレオタイプ内容モデル（stereotype content model: Fiske, Cuddy, Glick, & Xu, 2002; Fiske, Cuddy, & Glick, 2007）は、この枠組みを検討する上で有用なモデルである。このモデルによれば、さまざまな集団に対するステレオタイプは、能力（competence：有能か無能か）と人柄（warmth：暖かいか冷たいか）と

いう２つの主要次元によって記述される。また、そのいずれかが肯定的、もう片方が否定的であるパターンとして、「人柄は良いが能力は低い」という温情主義的偏見（paternalistic prejudice）と、「人柄は良くないが能力は高い」という羨望的偏見（envious prejudice）が想定され、それらはあわせて両面価値的ステレオタイプ（ambivalent stereotype）と総称される。さらに、これらの両面価値的ステレオタイプは、部分的に肯定的評価も含むことによってスティグマ集団の成員に社会システムやステレオタイプを受容させ、外集団にも否定的要素を設定することで内集団のストレスを低減しうるので、そのようなステレオタイプが存在する社会システムを甘受する方向に寄与することになる（大江, 2010）。たとえば、専業主婦は温情主義的偏見の対象となりやすいが、自身を含む内集団に「人柄がよい」という肯定的評価が付与されることや、外集団であるキャリア女性に対しては「人柄が良くない」という否定的評価が付与されることによって、たとえ低地位の立場にあっても、その立場を甘受しやすくなる、ということである。

このステレオタイプ内容モデルをBTS肯定論者／否定論者に適用するならば、肯定論者に対しては温情主義的、否定論者に対しては羨望的な両面価値的ステレオタイプが形成されると予測される。そこで本研究では仮説１として、BTS肯定論者はBTS否定論者に比べて、能力は低いが人柄は好ましいという温情主義的ステレオタイプが示されるであろう（逆にBTS否定論者に対しては、BTS肯定論者と比して能力は高いが人柄は好ましくないという羨望的ステレオタイプが示されるであろう）という可能性について検証する。

BTS肯定論者／否定論者ステレオタイプによる血液型信念の促進効果

また、BTS肯定論者に対する肯定的ステレオタイプ（および否定論者に対する否定的ステレオタイプ）の存在によって、人々のBTSが維持・促進されやすくなるのであれば、個人差としてのBTS肯定傾向は、各個人が有しているBTS肯定論者／否定論者に対するステレオタイプと連動するであろう。そこで本研究では、BTS肯定論者／否定論者に対するステレオタイプが、血液型信念を促進する可能性についても検討する。血液型信念（belief in blood-typed personality theory：坂本, 1995）とは、血液型ステレオタイプを信じる程度の個人差のことである。これまでの議論から、肯定論者に対するステレオタイプが好ましいほど、そして否定論者に対するステレオタイプが好ましくないほど、血液型信念が高くなると想定される。そこで仮説２として、血液型信念は、BTS肯定論者に対する肯定的ステレオタイプとは正の、BTS否定論者に対する肯定的ステ

レオタイプとは負の関連を示すと考えられる。

研究1

目的

BTS肯定論者／否定論者に対する両面価値的ステレオタイプについて、およびそれらと個人差要因としての血液型信念の関連について検討する。

方法

2011年6月、A県の複数大学の大学生を対象として、「青年における対人認知と性格の関連についての調査」と題した質問紙を実施した。実施方法としては、心理学関連の講義を受講している学生を対象とした一斉調査と、研究チーム（心理学を専門とする大学教員、大学院生、大学生）のメンバーが知人に回答を依頼する個別調査を併用した。いずれの方法についても、予め調査の目的や内容、回答者の権利（調査協力は任意であり、参加の拒否や回答の中断によって不利益は生じないこと、など）についての説明を行い、同意した者のみが回答した。一斉調査による調査協力者には、当該授業のコース・クレジットが付与された。また、研究手続き上の必要性に即して4種類の質問紙が作成され（詳細は後述）、それらをランダムに配付・実施した。

その結果、340名の回答が得られ、著しい不備のあった3名を除外した337名（男性136名、女性197名、不明4名、年齢M＝19.5歳、SD＝1.5歳）を有効データとした。

質問紙は以下の尺度で構成された。

県民ステレオタイプ尺度　本論文の主たる目的は、血液型ステレオタイプ肯定論者／否定論者に対するステレオタイプの検討である。しかし、その質問のみを実施すると、回答者が研究意図を推察することにより、意図的な回答の歪みが生じることが懸念された。そこで、「この調査では、ある特定集団に所属していたり、ある特徴を共有している人々が、世間の人々からどのような印象（イメージ）を持たれているかについて調べることを目的としています」という教示文に続けて、3種類の刺激人物を呈示することによって、回答者の意識が血液型ステレオタイプに焦点化されることの回避を試みた。

そこで第1の刺激人物として「A県民」を呈示し、A県民に対するステレオタイプの質問を実施した。この設定理由としては、回答者がいずれもA県内の大学生なので違和感なく回答を開始でき、それが後続の質問へのリハーサル機

能も果たすであろうと考えられたからである。実施に際しては、以下のような教示文を呈示した。「はじめに、『A県民』に対して世間一般の人々がもっているイメージについてお伺いします。以下のそれぞれの項目は、『A県民』に対して世間一般の人々がもっているイメージとして、どのくらいあてはまると思いますか。(あなた自身ではなく世間一般のイメージとしてお答えください。)『1．あてはまる』～『5．あてはまらない』の選択肢のうち、最もあてはまる数字に○をつけて下さい。」なお、この教示文で「回答者本人がどう思うか」ではなく、「世間一般の人々はどう思っている（と思う）か」という間接的な形での回答を求めたのは、社会的望ましさによる懸念を低減しながら文化的ステレオタイプを抽出することを意図したFiske et al. (2002) の方法に準じたものである。

その上で、能力次元と想定された10項目、人柄次元と想定された10項目、計20項目の評定語をランダムに呈示し、各語が刺激人物にどのくらい該当する（と世間一般の人が思っている）かについて、「1．あてはまらない」「2．あまりあてはまらない」「3．どちらともいえない」「4．ややあてはまる」「5．あてはまる」の5件法による回答を求めた。評定語は、Fiske et al. (2002) で使用されたものをベースとしながら、研究チームによる議論を通じて決定した。まず能力次元項目としては、Fiske et al. (2002) で用いられた「優秀な (competent)」「自信がある (confident)」「知的な (intelligent)」「有能な (capable)」「効率的な (efficient)」「熟練した (skillful)」の6語[1)]、さらに日本人の有能性イメージとして想定された「冷静な」「敏腕な」「物知りな」「理性的な」の4語を追加して用いた。一方、人柄次元項目としては、Fiske et al. (2002) で用いられた「寛容な (tolerant)」「温厚な (warm)」「優しい (good natured)」「誠実な (sincere)」「親しみやすい (friendly)」「善良な (well-intentioned)」「信頼できる (trustworthy)」の7語、さらに「思いやりがある」「人間味のある」「協力的な」の3語を追加した。

BTS肯定論者／否定論者ステレオタイプ尺度　次に、血液型ステレオタイプ肯定論者／否定論者のいずれかを刺激人物として呈示して、その刺激人物に対するステレオタイプについての評定を求めた。肯定論者を刺激人物とする場合は「次に、『血液型性格判断を信じている人（血液型と性格には関係があると思っている人)』に対して世間一般の人々がもっているイメージについてお伺い

---

1) Fiske et al. (2002) の研究1で有能性項目として用いられた「自主性のある (independent)」「競争力のある (competitive)」は、同論文の研究2で除外されていたこと、および日本人の有能性感覚にそぐわない可能性も考えられたので、本研究では使用しなかった。

します。」、否定論者を刺激人物とする場合は「次に、『血液型性格判断を信じていない人（血液型と性格には関係がないと思っている人）』に対して世間一般の人々がもっているイメージについてお伺いします。」という教示文で刺激人物を呈示した上で、A県民ステレオタイプで用いたものと同じ20項目の印象評定を実施した。

女性ステレオタイプ尺度　さらに、専業主婦もしくは女性管理職のいずれかを刺激人物として呈示して、同じ方法でステレオタイプ評定を求めた。この刺激人物は、回答者による研究目的の推測を防ぐためという先述した目的に加えて、尺度の妥当性検討のために設定した。さまざまな社会的カテゴリーの人々に対するステレオタイプを検討したFiske et al.（2002）では、女性実業家（businesswomen）[2] は高能力だが人柄がよくないと評価されており、専業主婦（housewives）は逆に低能力だが人柄はよいと評価されている。それと同様の結果が再現されれば、それは本研究のステレオタイプ尺度の妥当性の論拠のひとつとなるであろう。

質問紙はステレオタイプ質問の刺激人物に応じて、(a) A県民→肯定論者→専業主婦、(b) A県民→肯定論者→女性管理職、(c) A県民→否定論者→専業主婦、(d) A県民→否定論者→女性管理職という４パターンが作成され、回答者はそのいずれかのパターンの質問紙に回答した。各パターンの回答者数は (a) 88名、(b) 86名、(c) 80名、(d) 83名であり、質問紙パターンによる性別の偏りは有意でなかった（$\chi^2(3)=3.13$, *n.s.*）。

血液型信念尺度　上瀬・松井（1991）、坂本（1995）による、「血液型性格学」（ABO式血液型と性格には関係があるという考え方）を信じる程度を測定する尺度である。血液型ステレオタイプの有無（「血液型によって性格は異なる」など）、血液型性格学を理屈の上から信じる血液型理論的信念（「血液型の成分が異なれば性格にも影響を与えるはずだ」など）、血液型性格学を日常的な体験から信じる血液型経験的信念（「自分のみのまわりの人は血液型性格判断の結果がよくあてはまる」など）という３つの下位尺度で構成されているが、本研究では全体得点のみを使用することとした。「１．全くそう思わない」から「４．非常にそう思う」までの４件法で回答を求めた。

---

[2] 女性実業家やビジネスウーマンという語句は、日本人には若干なじみが薄く、その解釈も多様となってコンセンサスが得られないことが懸念されたので、本研究では代わりに女性管理職という語を用いた。

結果と考察

ステレオタイプ尺度の構成　ステレオタイプ尺度は、刺激人物の違いを問わず、能力次元と人柄次元の２次元によって構成されるという想定に基づいて、まずは刺激人物（A県民、BTS肯定論者、BTS否定論者、専業主婦、女性管理職）ごとに全20項目による因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った。なお、刺激人物がA県民の場合は全回答者データを用いて、それ以外は各刺激人物に該当する群毎の分析を実施した。

その結果、すべての刺激人物において、固有値の減衰状況と解釈可能性から２因子解が妥当であると判断され、いずれも想定通りの能力因子と人柄因子に該当することが確認された。また、20項目中16項目は、刺激人物の違いを問わず一貫した因子負荷パターンを示し、「優秀な」「有能な」「熟練した」「冷静な」「敏腕な」「物知りな」「理性的な」「知的な」の８項目は能力因子に、「善良な」「思いやりがある」「人間味がある」「温厚な」「寛容な」「優しい」「協力的な」「親しみやすい」の８項目は人柄因子に、それぞれ.38以上の因子負荷を示した。さらに、それら16項目を用いて再び同様の因子分析を行ったところ、すべての刺激人物、すべての項目について、想定通りの２因子による因子負荷パターンが確認された（Table １）。そこで、能力因子８項目と人柄因子８項目それぞれの合

Table 1　ステレオタイプ16項目による因子分析結果（最尤法、プロマックス回転）

	刺激人物と因子									
	A県民		BTS肯定論者		BTS否定論者		専業主婦		女性管理職	
	人柄	能力	人柄	能力	人柄	能力	人柄	能力	能力	人柄
1．優秀な	.20	**.55**	.00	**.68**	−.07	**.72**	.01	**.73**	**.86**	.05
2．善良な	**.68**	−.03	**.67**	.11	**.63**	.18	**.48**	.22	.37	**.49**
3．思いやりがある	**.71**	.00	**.55**	.33	**.68**	.05	**.68**	.12	.05	**.74**
4．有能な	.04	**.67**	−.02	**.62**	.06	**.81**	−.11	**.83**	**.88**	−.01
5．人間味のある	**.65**	.13	**.44**	.02	**.69**	−.20	**.56**	.07	−.04	**.70**
6．熟練した	−.05	**.41**	.11	**.56**	.28	**.52**	.16	**.46**	**.64**	.07
7．冷静な	−.02	**.41**	−.09	**.58**	−.15	**.49**	.01	**.39**	**.68**	−.02
8．温厚な	**.66**	−.14	**.60**	.08	**.68**	−.05	**.66**	−.10	−.12	**.69**
9．敏腕な	−.16	**.67**	−.03	**.73**	−.01	**.69**	−.09	**.68**	**.76**	−.07
10．物知りな	.06	**.51**	−.08	**.53**	.01	**.73**	−.02	**.54**	**.62**	.03
12．理性的な	.00	**.45**	.02	**.57**	−.01	**.51**	.12	**.40**	**.65**	.02
13．寛容な	**.67**	.01	**.75**	−.05	**.61**	−.06	**.70**	.03	.01	**.68**
16．優しい	**.82**	−.05	**.84**	−.09	**.81**	.06	**.81**	−.05	−.03	**.71**
17．協力的な	**.61**	.09	**.67**	−.03	**.69**	.05	**.55**	.09	.20	**.55**
18．知的な	−.01	**.68**	.00	**.76**	−.04	**.75**	.08	**.58**	**.74**	−.07
19．親しみやすい	**.69**	.02	**.72**	−.20	**.74**	−.07	**.77**	−.18	−.25	**.64**
因子間相関		−.02		.38		−.11		.29		−.12

計を、各刺激人物に対する能力ステレオタイプ得点、人柄ステレオタイプ得点とした[3]。刺激人物毎の能力ステレオタイプ尺度のα係数は、A県民$\alpha=.76$、BTS肯定論者$\alpha=.83$、BTS否定論者$\alpha=.85$、専業主婦$\alpha=.81$、女性管理職$\alpha=.90$であった。刺激人物毎の人柄ステレオタイプ尺度のα係数は、A県民$\alpha=.88$、BTS肯定論者$\alpha=.86$、BTS否定論者$\alpha=.88$、専業主婦$\alpha=.86$、女性管理職$\alpha=.85$であり、いずれも信頼性は十分であると判断された。

ステレオタイプ尺度の妥当性の検討　次に、上記のステレオタイプ尺度が、ステレオタイプ内容モデルで想定された能力次元と人柄次元の指標としての妥当性を有しているか検討するために、女性刺激人物の尺度得点の相違について検討した。先行研究から、専業主婦に対しては女性管理職よりも低能力だが人柄はよいという温情主義的ステレオタイプが想定されるので、専業主婦を刺激人物とした場合に、女性管理職を刺激人物とした場合と比べて、能力ステレオタイプは低く、人柄ステレオタイプは高くなるという、ステレオタイプ内容と刺激人物の交互作用が見出されたならば、それは尺度の妥当性の論拠となり得よう。なお、これらは性役割ステレオタイプの一種でもあり、回答者の性別による影響の可能性も考えられたので、ステレオタイプ内容（能力／人柄の被験者内要因)、刺激人物と回答者性別（いずれも２水準の被験者間要因）を独立変数とした３要因混合分散分析を実施した。

その結果、内容の主効果（$F(1,323)=8.81$, $p<.01$, $\eta_p^2=.03$)、刺激人物の主効果（$F(1,323)=11.25$, $p<.01$, $\eta_p^2=.03$)、内容と刺激人物の交互作用（$F(1,323)=429.43$, $p<.001$, $\eta_p^2=.57$)、刺激人物と性別の交互作用（$F(1,323)=4.31$, $p<.05$, $\eta_p^2=.02$)、３要因交互作用（$F(1,323)=6.50$, $p<.05$, $\eta_p^2=.02$）が有意であり、特に内容と刺激人物の交互作用による説明力が高かった。さらに、内容と刺激人物の交互作用について単純主効果検定を行ったところ、能力ステレオタイプは専業主婦（$M=24.06$）よりも女性管理職（$M=32.95$）の方が高く（$p<.001$)、人柄ステレオタイプは、専業主婦（$M=30.53$）の方が女性管理職（$M=24.32$）よりも高い（$p<.001$）という、いずれも予測を支持する有意差が示された（Figure １)。したがって、本研究で構成されたステレオタイプ尺度は、ステレオタイプ内容モデルで想定されている２次元の指標として妥当性を有していると考えられる。

BTS肯定論者／否定論者に対するステレオタイプの検討　次に、BTS肯定論

---

[3] いずれも８項目５件法なので、可能得点範囲は８～40点、中性点は24点となる。

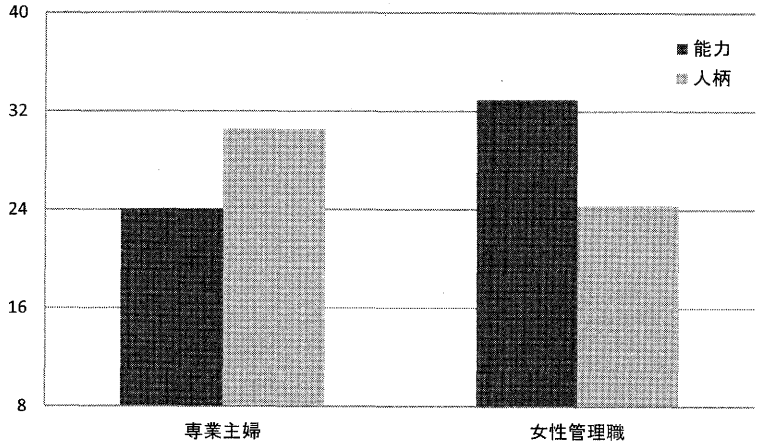

Figure 1　女性ステレオタイプ（研究１）

者／否定論者に対する両面価値的ステレオタイプについて検討した。なお、男性よりも女性の方が血液型ステレオタイプに対して肯定的であるという先行研究の指摘（上瀬，1994）、および後述する血液型信念の性差から、この分析でも性差が存在する可能性が想定されたので、ステレオタイプ内容（２水準の被験者内要因）、刺激人物と回答者性別（いずれも２水準の被験者間要因）による３要因混合分散分析を実施した。

その結果、内容の主効果（$F(1,322)=14.72$，$p<.001$，$\eta_p^2=.04$）、刺激人物の主効果（$F(1,322)=49.63$，$p<.001$，$\eta_p^2=.13$）、性別の主効果（$F(1,322)=4.63$，$p<.05$，$\eta_p^2=.02$）、内容と刺激人物の交互作用（$F(1,322)=328.80$，$p<.001$，$\eta_p^2=.51$）、内容と性別の交互作用（$F(1,322)=5.29$，$p<.05$，$\eta_p^2=.02$）が有意であり、特に内容と刺激人物の交互作用の効果が顕著であった。そこでさらに内容と刺激人物の交互作用について単純主効果検定を行ったところ、能力ステレオタイプは肯定論者（$M=19.25$）よりも否定論者（$M=28.84$）の方が高く（$p<.001$）、人柄ステレオタイプは否定論者（$M=20.81$）より肯定論者（$M=24.48$）の方が高い（$p<.001$）という予測通りの有意差が示された（Figure ２）。したがって、本研究の仮説１「血液型ステレオタイプ肯定論者は否定論者に比べて、能力的には低く、人柄は高く評価されるであろう」という仮説は支持された。ただし、３要因交互作用が有意でなかったことから、両面価値的ステレオタイプに対する性別の調整効果は見出されなかった。

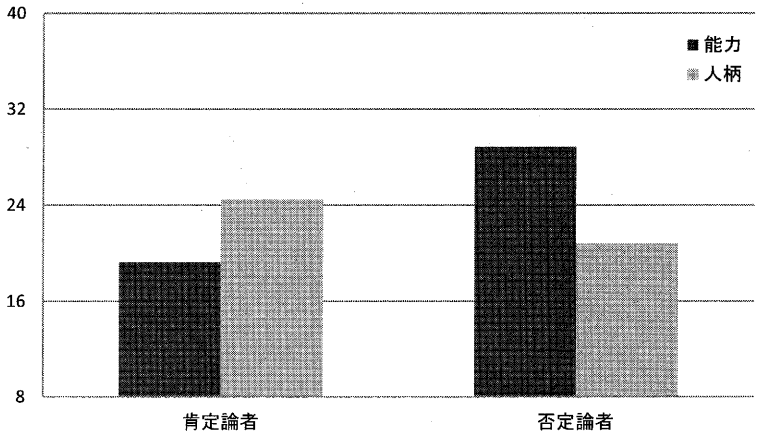

Figure 2　BTS肯定論者／否定論者ステレオタイプ（研究１）

BTS肯定論者／否定論者ステレオタイプと血液型信念の関連　BTS肯定論者／否定論者ステレオタイプが血液型信念に及ぼす影響について検討するために、まず血液型信念得点を算出した（M=31.9, SD=6.7, α =.86）。ちなみに血液型信念得点を従属変数として、回答者の性別と血液型を独立変数とした２要因分散分析を実施したところ、性別の主効果のみ有意であり（$F(1, 315)=8.08$, $p<.01$, $\eta_p^2=.03$）、男性（M=30.55）より女性（M=32.92）の方が高得点であった。

次に、刺激人物（BTS肯定論者／否定論者）による群ごとに、能力／人柄ステレオタイプの標準化得点およびそれらの交互作用項を説明変数、血液型信念を基準変数とした重回帰分析を実施した。その結果、まずBTS肯定論者回答群を対象とした分析（$R^2=.18$, $p<.001$）では、能力ステレオタイプのみが有意な正の寄与を示し（$\beta=.45$, $t=6.18$, $p<.001$）、人柄ステレオタイプ（$\beta=-.09$）、交互作用項（$\beta=.06$）は有意な寄与を示さなかった。次にBTS否定論者回答群を対象とした分析では、モデル自体が有意でなかった（$R^2=.02$, $p=.10$）。したがって、BTS肯定論者に対する肯定的ステレオタイプ、およびBTS否定論者に対する否定的ステレオタイプが血液型信念を促進するという仮説は、BTS肯定論者に対する能力ステレオタイプについてのみ支持された。

まとめ　「BTS肯定論者はBTS否定論者に比べて、能力は低いが人柄は好ましいという温情主義的ステレオタイプが示されるであろう。逆にBTS否定論者に

対しては、BTS肯定論者と比して能力は高いが人柄は好ましくないという羨望的ステレオタイプが示されるであろう」という仮説１は支持された。しかし、「血液型信念は、BTS肯定論者ステレオタイプとは正の、BTS否定論者ステレオタイプとは負の関連を示すであろう」という仮説２については、BTS肯定論者に対する能力ステレオタイプにおける支持に留まった。これらの結果は、BTS肯定論者に対しては温情主義的ステレオタイプが、否定論者に対しては羨望的ステレオタイプが示されるが、必ずしもそれらは個人の血液型信念に直結していないことを示唆している。特に血液型信念との関連について、BTS肯定論者／否定論者ともに人柄ステレオタイプとの関連が示されなかったことは、人柄を好ましく思われたいので血液型信念を維持している、という想定と合致しない。

そこで研究２として、研究１と異なるサンプルにおいても、同様の結果が再現されるかを検討することとした。さらに研究２では、BTS肯定論者／否定論者に対するステレオタイプの調整要因として、文化的自己観による影響を検討することとした。すなわち、他者の顔色を窺い、同調しようとする相互協調的自己観が高いほど、両面価値的ステレオタイプがより顕著になるという可能性についても検討する。

研究２

目的

研究１の仮説１、仮説２について再検討する。さらに、相互協調的自己観が両面価値的ステレオタイプを増幅するという仮説３について検討する。

方法

2011年12月から2012年１月にかけて、B県とC県の大学において心理学の講義を受講している大学生に、「現代青年における対人認知と対人行動に関する調査」と題した質問紙調査を実施した。研究１と同様に調査の目的や内容、回答者の権利について説明を行い、同意した者のみ回答した。回答に著しい不備のあった者を除外した結果、382名（男性96名、女性286名、年齢M＝20.1歳、SD＝1.2歳）の回答を有効データとした。

質問紙は以下の尺度で構成された。

県民ステレオタイプ尺度　研究２も研究１と同様に、BTS肯定論者／否定論者に対するステレオタイプの質問のみを実施することによる回答の歪みを防ぐ

ために、まずはB県民およびC県民に対する県民ステレオタイプの質問を実施した。教示文や選択肢は研究１と同じであるが、項目は研究１で最終的に使用された16項目（能力８項目、人柄８項目）を用いた。なお、その結果の詳細は本論文の目的とするところではないので省略する。

BTS肯定論者／否定論者ステレオタイプ尺度　次に、研究１と同様に血液型ステレオタイプ肯定論者／否定論者のいずれかを刺激人物として呈示して、その刺激人物に対するステレオタイプについての評定を求めた（質問紙はランダムに配付した）。教示文や選択肢は研究１と同じであるが、項目は研究１で最終的に使用された16項目（能力８項目、人柄８項目）を用いた。肯定論者について回答したのは199名、否定論者について回答したのは183名であり、性別による偏りは有意でなかった（$\chi^2(1)=0.50$, *n.s.*）。

血液型信念尺度　研究１と同じである。

文化的自己観尺度　高田（2000）による相互独立的－相互協調的自己観尺度を実施した。相互独立的自己観４項目と相互協調的自己観６項目からなり、「１．あてはまらない」から「５．あてはまる」までの５件法で回答を求めた。

結果

ステレオタイプ尺度の構成　BTS肯定論者／BTS否定論者それぞれにおいて、全16項目による因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行ったところ、いずれも想定通りの因子負荷パターンを示したので、能力因子８項目と人柄因子８項目それぞれの合計を、刺激人物に対する能力ステレオタイプ得点、人柄ステレオタイプ得点とした。信頼性係数はBTS肯定論者が能力$\alpha=.89$、人柄$\alpha=.90$、BTS否定論者が能力$\alpha=.85$、人柄$\alpha=.88$であった。

BTS肯定論者／否定論者に対するステレオタイプの検討　BTS肯定論者／否定論者に対する両面価値的ステレオタイプについて検討するために、研究１と同じく、ステレオタイプ内容（２水準の被験者内要因）、刺激人物と回答者性別（いずれも２水準の被験者間要因）による３要因混合分散分析を実施した。

その結果、内容の主効果（$F(1,370)=6.94$, $p<.01$, $\eta_p^2=.02$）、刺激人物の主効果（$F(1,370)=35.43$, $p<.001$, $\eta_p^2=.09$）、そして内容と刺激人物の交互作用（$F(1,370)=290.17$, $p<.001$, $\eta_p^2=.44$）が有意であり、やはり内容と刺激人物の交互作用による説明力が高かった。また、内容と刺激人物の交互作用について単純主効果検定を行ったところ、やはり能力ステレオタイプは肯定論者（$M=19.22$）よりも否定論者（$M=29.43$）の方が高く（$p<.001$）、人柄ステレオタイプは否定論者（$M=20.90$）より肯定論者（$M=25.46$）の方

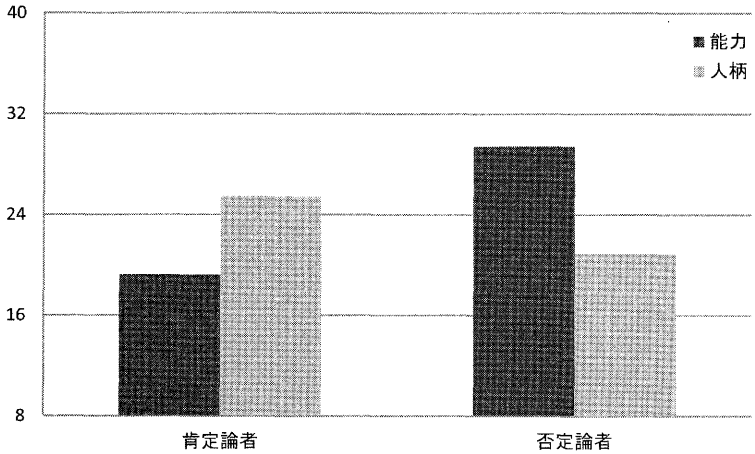

Figure 3　BTS肯定論者／否定論者ステレオタイプ（研究2）

が高い（$p<.001$）という予測通りの有意差が示された（Figure 3）。したがって、研究2においても、BTS肯定論者に対しては温情主義的ステレオタイプが、BTS否定論者に対しては羨望的ステレオタイプが示されるという仮説1は支持された。

BTS肯定論者／否定論者ステレオタイプと血液型信念の関連　まず研究1と同じく血液型信念得点（$M=31.48$, $SD=7.66$, $\alpha=.89$）を従属変数、回答者性別と血液型を独立変数とした2要因分散分析を実施したところ、やはり性別の主効果のみ有意であり（$F(1,372)=6.58$, $p<.05$, $\eta_p^2=.02$）、男性（$M=29.49$）より女性（$M=32.15$）の方が高得点であった。

次に、刺激人物（BTS肯定論者／否定論者）による群ごとに、能力／人柄ステレオタイプの標準化得点およびそれらの交互作用項を説明変数、血液型信念を基準変数とした重回帰分析を実施した。その結果、まずBTS肯定論者回答群を対象とした分析（$R^2=.15$, $p<.001$）では、能力ステレオタイプのみが有意な正の寄与を示し（$\beta=.39$, $t=5.65$, $p<.001$）、人柄ステレオタイプ（$\beta=.09$）、交互作用項（$\beta=.12$）は有意な寄与を示さなかった。一方、BTS否定論者回答群を対象とした分析では、やはりモデル自体が有意には至らなかったが有意傾向であり（$R^2=.02$, $p=.08$）、能力ステレオタイプが有意な負の寄与を示したが（$\beta=-.18$, $t=-2.41$, $p<.05$）、人柄ステレオタイプ（$\beta=.04$）、交互作用項（$\beta=.02$）の効果は示されなかった。したがって、血液型信念は

BTS肯定論者ステレオタイプとは正の、否定論者ステレオタイプとは負の関連を示すであろうという仮説2は、能力ステレオタイプについては支持されたが、人柄ステレオタイプについては支持されなかった。

BTS肯定論者／否定論者ステレオタイプに及ぼす文化的自己観の調整効果

文化的自己観尺度は、信頼性を確認した上で項目平均を下位尺度得点として採用した（相互独立的自己観$M=3.02$, $SD=0.69$, $\alpha=.64$；相互協調的自己観$M=3.84$, $SD=0.58$, $\alpha=.71$）。次に、刺激人物による群毎に、ステレオタイプ得点と文化的自己観下位尺度の相関係数を算出したところ、BTS肯定論者については、人柄ステレオタイプと相互協調的自己観が正の有意傾向を示したのみであったが（$r=.13$, $p<.10$）、BTS否定論者については、相互独立的自己観が人柄ステレオタイプと正の（$r=.19$, $p<.05$）、相互協調的自己観が能力ステレオタイプと正の（$r=.29$, $p<.001$）、人柄ステレオタイプと負の（$r=-.25$, $p<.01$）有意な関連を示した。これらの結果は、(a) 相互独立的自己観はBTS肯定論者ステレオタイプと関連しないが、それが高いほどBTS否定論者の人柄を好ましく評価する；(b) 相互協調的自己観が高いほどBTS肯定論者の人柄を肯定的に、BTS否定論者の人柄を否定的に評価する；(c) 相互協調的自己観が高いほど、BTS否定論者の能力を高く、人柄を低く評価するという、BTS否定論者に対する羨望的ステレオタイプを増幅する；ことを示唆している。さらに、(c) の増幅効果について、相互協調的自己観得点を平均値で高群と低群に区分して、それとステレオタイプ内容を独立変数とした2要因混合分散分析をBTS否定論者回答群に実施したところ、やはり相互協調自己観とステレオタイプ内容の交互作用が有意であり（$F(1,172)=16.75$, $p<.001$, $\eta_p^2=.09$）、相互協調的自己観高群は低群に比べて、BTS否定論者に対する羨望的ステレオタイプをより顕著に示した（Figure 4）。このことは、相互協調的自己観が高いほど、血液型ステレオタイプを否定することによって他者から人柄を悪く評価されてしまうことへの恐れが強くなる、という可能性を部分的に示していると考えられる。したがって、相互協調的自己観が高いほど、両面価値的ステレオタイプが顕著になるという仮説3は、BTS否定論者に対してのみ支持された。

まとめ　研究2においても、「BTS肯定論者に対しては温情主義的ステレオタイプが、BTS否定論者に対しては羨望的ステレオタイプが示されるであろう」という仮説1は支持された。また、「血液型信念は、BTS肯定論者ステレオタイプとは正の、BTS否定論者ステレオタイプとは負の関連を示すであろう」という仮説2についても、基本的には研究1と同じく、BTS肯定論者に対する能力

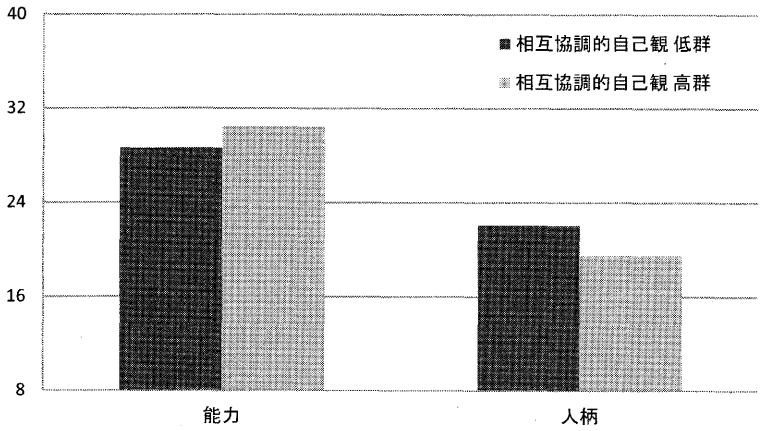

Figure 4　相互協調的自己観によるBTS否定論者ステレオタイプ（研究２）

ステレオタイプにおいてのみ明確に示された。さらに、相互協調的自己観が高いほど、BTS否定論者に対するステレオタイプが顕著となるという調整効果も示された。

総合考察

本論文はステレオタイプ内容モデルの枠組みを用いて、BTS肯定論者に対しては「能力は低いが人柄は良い」という温情主義的ステレオタイプが、BTS否定論者には「能力は高いが人柄は良くない」という羨望的ステレオタイプが示されるのではないかという仮説、さらにそれらのステレオタイプが血液型信念を促進／抑制する可能性、文化的自己観によって調整される可能性について検討した。

BTS肯定論者／否定論者に対する両面価値的ステレオタイプについて

まずBTS肯定論者／否定論者に対する両面価値的ステレオタイプについては、どちらの研究でも予測通り、BTS肯定論者に対しては温情主義的ステレオタイプが、BTS否定論者に対しては羨望的ステレオタイプが明確に示され、仮説１は支持された。このことは、血液型ステレオタイプ肯定論者／否定論者という日本独特の集団カテゴリーにおいても、その集団間比較においてステレオタイプ内容モデルの両面価値的ステレオタイプが適用されうることを示している。

さらに、一般的には能力次元よりも人柄次元の方が重要視される傾向にある（Fiske et al., 2007）ことから、否定論者よりも肯定論者の方が人柄次元において好ましく評価されやすいという本論文の知見は、血液型ステレオタイプ肯定論を促進するような社会的風潮の存在を暗示しているとも考えられよう。

BTS肯定論者／否定論者ステレオタイプと血液型信念の関連について

次に、血液型信念は、BTS肯定論者ステレオタイプとは正の、BTS否定論者ステレオタイプとは負の関連を示すであろうという仮説2については、両研究ともに、BTS肯定論者に対する能力ステレオタイプにおいてのみ明確に示された。すなわち、BTS肯定論者の能力ステレオタイプを高く評価しているほど、回答者自身の血液型信念も強かった。しかし、人柄ステレオタイプと血液型信念の関連が見出されなかったことは、人柄を好ましく評価されたいが故に血液型信念を維持するのではないか、という当初の議論と合致しない結果である。したがって、血液型信念の高低は、血液型性格判断を肯定／否定することによって生じる人柄ステレオタイプとは別の要因によって規定されると考えた方が妥当であろう。このように、血液型信念が能力ステレオタイプと関連する一方で人柄ステレオタイプと関連しなかった理由としては、本研究で用いた血液型信念の尺度項目が、「血液型性格判断は正しいか否か」といった、論理的内容であったことが挙げられよう。これらは命題の是非や判断の正確性に関する問題であり、それらと有能性、理性、知性などの能力次元が連動することは自然であるが、一方で温かさや優しさといった人柄次元とは、また別の話であろう。さらにここから、「血液型性格判断は正しいか」という論理的次元ではなく、「血液型性格判断は親しさを促進すると思うか」といった社会情緒的次元から血液型性格判断への肯定的態度を捉えるような質問項目を用いれば、それが人柄ステレオタイプと関連する可能性もありうるのではないだろうか。

BTS肯定論者／否定論者ステレオタイプと文化的自己観の関連について

BTS肯定論者／否定論者ステレオタイプと文化的自己観の関連については、まず相互独立的自己観が高いほどBTS否定論者の人柄ステレオタイプを好ましく評価することが示された。他者に左右されず自身の主張を貫く人ほど、メディアなどに振り回されないBTS否定論者に対して肯定的印象を抱くことは妥当であるように思われるが、なぜそれが能力次元でなく人柄次元のみで示されたのかは不明である。次に、相互協調的自己観が高いほどBTS肯定論者の人柄を肯定的に、BTS否定論者の人柄を否定的に評価する傾向にあった。これは、他者の顔色を窺い同調しようとする傾向が高いほど、血液型性格判断という俗説に

同調することへの好ましさを高く（非同調の好ましさを低く）評価していることの反映とも考えられよう。さらに、相互協調的自己観が高いほどBTS否定論者に対する羨望的ステレオタイプが増幅されたことから、相互協調的自己観が高いほど、両面価値的ステレオタイプが顕著になるという仮説3は、BTS否定論者に関してのみ支持された。BTS否定論者は、マスメディアにおいて流布しているような通俗的見解に反する、いわば独立的な立場の人であり、それが相互協調的自己観の高い人にとって「自分とは違う存在」という感覚を強めて、よりステレオタイプ的な判断を促すのかもしれない。

結論と今後の課題

本研究では、BTS肯定論者は否定論者に比して能力は低いが人柄はよい、と評価される傾向にあることが明らかにされた。これは血液型ステレオタイプを促進する社会的状況の存在を明らかにすると同時に、日本では未だ実証的研究が少ないステレオタイプ内容モデルの可能性を示した試みとしても、意義あるものと言えよう。しかしながら、本研究の知見は、あくまで大学生をサンプルとした調査によって得られたものに過ぎず、その普遍性や適用可能性については、さらに検討を重ねる必要があるだろう。

また、教示文などによって可能な限りの工夫はしたものの、自記式の顕在的なステレオタイプ測度であるがゆえに、そこに社会的望ましさなどによる歪みなどの影響が生じている可能性は否めない。その検証のために、たとえば潜在的ステレオタイプにおいても同様の傾向が存在するかを検討することも有用であろう。

さらに、ステレオタイプ内容モデルを提唱したFiske et al.（2002）によれば、能力次元は社会的地位との間に正の相関が、人柄次元は競争性と負の相関がそれぞれ想定されている。また、Cuddy, Fiske, and Glick（2007）によれば、人柄次元はそのステレオタイプ集団に対する積極的行動（援助するか攻撃するか）を、能力次元は消極的行動（提携するか無視するか）を、それぞれ予測すると想定されている。もし、それらの知見が本研究で見出されたBTS肯定論者／否定論者ステレオタイプにも適用されるのであれば、BTS肯定論者は低地位だが競争的でないと見なされ黙認されやすく、逆に否定論者は高地位だが競争的と見なされて敵視されやすい、というパターンを想定することも可能であろう。はたして実際にそのような関連があるのかを検討することは、ステレオタイプ内容モデルの妥当性や適用可能性について理解を深めるためにも、そしてどのような社会的要因が血液型信念の維持に寄与しているのかを論じる上でも有意

義であろう。

最後に、本研究で見出されたBTS肯定論者／否定論者に対するステレオタイプが、実際に、日常生活における血液型ステレオタイプに関する会話や発言を、促進もしくは抑制しているのかについては、本研究では明らかにされていない。その検討も、「ステレオタイプ保持者に対するステレオタイプがステレオタイプを維持する方向に機能しうる」という本研究の主張の説得力を吟味する上で、重要な課題のひとつと言えよう。

引用文献

Cuddy, A. J. C., Fiske, S. T., & Glick, P. (2007). The BIAS map: Behaviors from intergroup affect and stereotypes. *Journal of Personality and Social Psychology, 92,* 631－648.

Fiske, S. T., Cuddy, A. J. C., Glick, P., & Xu, J. (2002). A model of (often mixed) stereotype content: Competence and warmth respectively follow from perceived status and competition. *Journal of Personality and Social Psychology, 82,* 878－902.

Fiske, S. T., Cuddy, A. J. C., & Glick, P. (2007). Universal dimensions of social cognition: Warmth and competence. *Trends in Cognitive Science, 11,* 77－83.

廣岡秀一・小川一美・元吉忠寛（2000）．クリティカルシンキングに対する志向性の測定に関する探索的研究　三重大学教育学部研究紀要（教育科学），*51,* 161－173.

上瀬由美子（1994）．血液型ブーム　松井　豊（編）　ファンとブームの社会心理　サイエンス社　pp.167－183.

上瀬由美子・松井　豊（1991）．血液型ステレオタイプの機能と感情的側面　日本社会心理学会第32回大会発表論文集，296－299.

上瀬由美子・松井　豊（1996）．血液型ステレオタイプの変容の形―ステレオタイプ変容モデルの検証　社会心理学研究，*11,* 170－179.

工藤恵理子（2003）．対人認知過程における血液型ステレオタイプの影響―血液型信念に影響されるものは何か　実験社会心理学研究，*43,* 1－21.

元吉忠寛（2013）．社会的クリティカルシンキングのすすめ　心理学ワールド，*61,* 17－20.

大江朋子（2010）．ステレオタイプ　.浦　光博・北村英哉（編著）　展望　現代

の社会心理学１―個人のなかの社会　誠信書房　pp.149－169.
小塩真司（2010）．はじめて学ぶパーソナリティ心理学　ミネルヴァ書房
坂本　章（1995）．血液型ステレオタイプによる選択的な情報使用―女子大学生に対する２つの実験　実験社会心理学研究，*35*，35－48
佐藤達哉（1993）．血液型性格関連説についての検討　社会心理学研究，*8*，197－208.
高田利武（2000）．相互独立的－相互協調的自己観尺度に就いて　奈良大学総合研究所所報，*8*，145－163.
山岡重行（2011）．テレビ番組が増幅させる血液型差別　心理学ワールド，*52*，５－８．

謝辞

本研究の実施に際し、栗林克匡先生（北星学園大学）、土屋耕治先生（南山大学）、藤田知加子先生（南山大学）、村瀬綾氏（元静岡大学大学院人文社会科学研究科）のご協力を得ました（50音順）。ここに記して感謝申し上げます。